会話場面における視線行動と笑顔に着目したSSTの効果

○土屋 裕希乃

(青山学院大学大学院)

キーワード：社会的スキル, 笑顔, 視線

The effects of Social Skills Training focused on gaze behavior and smile in a conversation
Yukino Tsuchiya

(Aoyama Gakuin University)

Key Words : Social Skills, Smile, gaze

目 的

土屋 (2012) は笑顔と視線のそれぞれに焦点を当てたSSTを作成し、就職面接場面において有効性を示した。本研究では笑顔と視線の両方を組み合わせたSSTを新たに作成した。その効果を検討するために同性との初対面場面を設定し、SSTによってソーシャルスキルが短期的および長期的にどう変化するか検討することとする。

方 法

実験参加者 大学1, 2年生47名 (男性9名, 女性38名, 平均年齢20.19歳) を対象に行った。

実験条件 視線トレーニング群11名 (以下E群), 笑顔トレーニング群11名 (以下S群), 非言語トレーニング群13名 (以下N群), 統制群12名 (以下C群) であった。

測度 ソーシャルスキル 基礎スキルとして改訂版ENDE2尺度 (土屋・遠藤, 2012) 計19項目, 実践スキルとしてKiss-18 (菊池, 1988) 計8項目。5件法で回答を求めた。

手順 同意を得た参加者に対し実施した。初対面の同性を相手に仲良くなることを目的として6分半自由に話をする会話実験を行った。会話終了後、質問紙に回答を求めた (T1)。質問紙への回答後、ソーシャルスキルについての講義を実施した。C群は1回目の実験をここで終了とし、SSTを実施する3群は続けてトレーニングの説明および実施をした。SSTは1週間に1セッションで計4セッション、異なるペアで実施した。初回の会話実験から約1ヶ月後に再度会話実験を行い質問紙に回答を求めた (T2)。2回目の会話実験からさらに1ヶ月後、質問紙に回答を求め (T3)、すべての実験を終了とした。

倫理的配慮 実験前に実験内容についての説明を文書および口頭で行い、実験前や実験中いつでも中断や中止が可能であることを伝えた。また質問紙に実験に関する自由記述欄を設け、配慮に努めた。

結果

実施前の群間比較 SST実施前における条件群の群間比較をするために、T1の各下位尺度得点について一要因の分散分析を行ったところいずれも有意差は認められなかった。ソーシャルスキルの変化 SSTによるソーシャルスキルの短期的効果を検討するために、実験条件 (4) × 実験時期 (2) の二元配置の分散分析を行った。効果量が中程度であったのは基礎スキルでは解説、意図的表出、無意図的表出であった。実践スキルでは初歩的なスキル、ストレスを処理するスキルであった。これらについて単純主効果の検定を行った結果、解説ではN群 $[F(1,43)=9.01, p<.01, \eta^2p=.17]$ 、意図的表出ではE群 $[F(1,43)=8.23, p<.01, \eta^2p=.16]$ がT1からT2で有意に得点が高まった。初歩的なスキルではE群 $[F(1,43)=7.92, p<.01, \eta^2p=.13]$ およびN群 $[F(1,43)=6.70, p<.05, \eta^2p=.04]$ でT1からT2で有意に得点が高まった。

次に長期的効果を検討するために実験条件 (3) × 実験時期

(2) の二元配置の分散分析を行った。効果量が中程度であったのは基礎スキルでは解説、意図的表出、無意図的表出であった。実践スキルでは初歩的なスキル、高度なスキル、感情処理のスキル、ストレスを処理するスキルであった。これらについて単純主効果の検定を行った結果、解説ではS群 $[F(2,28)=9.70, p<.01, \eta^2p=.41]$ とE群 $[F(2,28)=16.65, p<.001, \eta^2p=.54]$ においてT1からT3、N群 $[F(2,28)=11.85, p<.001, \eta^2p=.46]$ でT1からT2およびT1からT3で有意に得点が向上した。意図的表出ではS群 $[F(2,28)=3.88, p<.05, \eta^2p=.22]$ でT1からT3、E群 $[F(2,28)=4.67, p<.05, \eta^2p=.25]$ でT1からT2およびT1からT3で有意に向上した。無意図的表出ではN群 $[F(2,28)=7.73, p<.05, \eta^2p=.36]$ でT1からT3、T2からT3で有意に得点が高まった。初歩的なスキルではE群 $[F(2,28)=4.43, p<.05, \eta^2p=.24]$ でT1からT2、T1からT3で有意に得点が向上した。高度なスキルではS群 $[F(2,28)=3.60, p<.05, \eta^2p=.20]$ でT1からT2で得点有意に向上した。図1に解説と意図的表出の変化を示す。

考 察

本研究の結果からSSTから1ヶ月経過後も効果が認められたスキルは、E群では解説と意図的表出と初歩的なスキル、S群では解説と意図的表出と高度なスキル、N群では解説と無意図的表出であった。よって基礎スキルと実践スキルの両方を向上するトレーニングであることが示された。E群とS群で実践スキルの効果に差がみられた要因として視線と笑顔の機能の違いが考えられる。良好な対人関係の構築にはまず相手を正確に認識する必要があり、視覚的に相手の情報を収集することは重要な最初のステップになると考えられ、初歩的なスキルに効果がみられたと考えられる。笑顔には印象管理機能 (Patterson, 1983) が備わっていることから、相手との関係を継続、発展させるチャンネルであると考えられる。

図1 解説と意図的表出の変化